

阿蘇下野狩史料集◆目次

凡例

永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』および関連文書等の解題……………三  
阿蘇家所蔵下野狩関連史料の解題……………三

一 永青文庫所蔵下野狩関連記録

- 1 下野狩日記 上(二)……………二五
- 2 下野狩日記 下(三)……………五五
- 3 下野狩旧記抜書(一)……………九七

二 永青文庫所蔵下野狩関連文書

- 1 下野三狩矢野茂左衛門覚書写……………一七三
- 2 板書……………一七七
- 3 宮内権大輔真摺書状……………一七七

4	下野之三狩書物之拔書写	一七六
5	下野狩由来拔書写	一八二

三 阿蘇家所蔵下野狩関連史料

1	天保十三年下田能延へ送る拔書写	一八三
2	下野御狩記録拔書写	一八三
3	下野御狩三物替事	一八九
4	下野之三狩書物拔書写	一九八
5	下野狩并山神祭作法写	一九三
6	下野狩根本記写	二〇〇
7	下野狩由来記写	二二二
8	下野狩再興願記録	二二八
9	鷹山下野御狩鹿立鹿蔵地名比定書	二三五

挿図

史料の用語・地名等の解説

阿蘇家系図

下野狩関連地名推定図(折込地図)

あとがき

阿蘇下野狩史料集

れている。しかし、この史料では、鷹山下野の狩蔵四十八か所とその名所の地名の比定が行われている。史料の時期は不明であるが、幕末頃とみられる。

ここに提示した下野狩関連の史料は阿蘇大官司惟馨と次の大官司惟治の段階のものがほとんどである。惟馨・惟治・惟敦の三代の大官司は、国学を学び、阿蘇下野狩の再興と阿蘇家興隆に努め、その史料の整理、編纂を行っている。惟馨の阿蘇家伝の編纂と阿蘇文書の書写は特筆すべき事業である。その子惟治は、尊皇派に身を投じ活動をし、真木和泉らと交友した。ここに収録した下野狩の記録は、惟治が書写したものが多く、すでに、前段の『下野狩日記』『下野狩旧記拔書』の解題でも述べたように、『下野狩集説秘録』は、『下野狩日記』と『下野狩旧記拔書』の記事を抜出し、神仏習合的、仏教的記事部分ができるだけ排除し、再編纂したものである。その製作者は惟馨の可能性も考えられるが、過激な尊王・国学思想をもった惟治とその子息惟敦の時期、幕末期に作られた可能性がより高い。

### 一 永青文庫所蔵下野狩関連記録

#### 1 下野狩日記 上(二)

(表紙)



(内題) 下野御狩日記 上巻

方便殺生

一、肥後國阿蘇郡下野之狩、日域無隱祭礼也、厥情以方便致生超<sup>タリ</sup>菩薩萬行<sup>ニ</sup>、名利善根勝<sup>ケリ</sup>提

婆五逆<sup>ニモ</sup>、鹿野苑之悪王日々狩<sup>ニ</sup>千鹿<sup>ヲ</sup>、殃屈摩羅尊者日々斂<sup>テ</sup>三千<sup>不知</sup>。放下<sup>ス</sup>、終得<sup>ニ</sup>菩提<sup>ニ</sup>事真甚、

贅狩  
鯰

亦切<sup>ル</sup>猪万<sup>ヲ</sup>既是善悪之兩輪也、此猪<sup>狩カ</sup>神武天皇自震旦皈朝之時、始彼魚<sup>ト</sup>契約贅狩、鯰本

西野原  
高峯原

黃帝  
蚩尤

地〔釋迦〕、天皇〔垂迹觀音〕、定賜所之政也、一天泰平国家豊饒ノ當家繁榮之本懷也矣、代之更〔タカ〕不可懈怠狩也、然者魔道恐〔降伏自在之弓〕、退〔散千里外〕、諸天者乘〔再拜弊〕、影〔向〕一郡内西野原、今日狩高峯原禽獸、山野猪鹿出〔此三之馬場〕、仲〔神通鎗矢〕而爲成佛願、逢此狩見物貴賤群集驚耳目、無余念神誓尤深、於末世若此狩怠無贅時、此明神食〔持〕左膊〔衆生〕救苦〔託宣〕鳴呼神慮新ナリ、年々奥劫、應祭獻時、恃狩衆之德、弥多帶行騰、馬上引弓、得自由藝免、明湯由基、射〔俵黃連知之〕、嚼〔鏃〕皆是弓法達者也、就中黃帝之箭射〔蚩尤的〕、頗狩人鎗矢射塵鹿之群、正施和光同塵、垂迹當神鑒擁之故也、云尔已耳、〔神代如此〕序書、

〔朱点以下同じ〕  
〔一〕、神武廿年〔乙丑〕正月廿日狩、同二月初贅卯日也、

〔二〕、此下野御狩次第之事、可入道少々首置申處也、有習多、古今下之時儀如件、

〔三〕、中馬場〔東之山岩藏〕打下候へハ、薦原口・薦池口中間〔巖塚〕、有爰テ狩祭、有数之口傳、

巖島

〔一〕、巖嶋と〔ハイツク〕しまと云なり、

巖塚

〔一〕、巖塚〔塚〕と〔ハイツク〕し嶋とも云、口傳、

一、御惣官從御遣候狩祭之物之事、

〔一〕、数定物也、

〔二〕、御酒竹用五、〔一〕削物、〔猪鹿之間〔智カ〕イテ獅子〔別而猪本也〕、魚〔一掛鯛各吉之〕問也、取肴〔改丁〕ニ合

音鹿責  
早角

テ五献、下田方ヨリ赤飯・棗・焼魚・御酒竹用三、肴三、フチ付十二枚、薄折敷十二枚持られ候、〔二〕騎馬上よりハ竹用ニツ、御肴ニ有、合取合テ竹用十二、肴十二、音鹿責〔沢野〕・早角〔沢野〕請取申候て、〔巖塚〔塚〕にて〕狩祭仕候、〔南郷之狩師八人定候役也、有口傳〕、

〔一〕、下野稽古ハ御狩近成候てハ無候、自然落馬候て右手ナト被付候てハ當日事闕候、人々爲御得心記申候、

鬘搔馬場

〔一〕、鬘搔野馬場〔馬カ〕ニハ仲間一騎討手責子入候、通山之許ニ物越之掘有、其前を前ニ置テ搜候、

阿蘇ノ御祭御初米ハ各々人々奉手向候、御領分同前ニ候哉、口傳、

中の馬場  
恒例塚

〔一〕、中の馬場、岩藏より下候所、東に二町間程にて恒例塚〔塚〕、爰許ニ而見はからい候て阿蘇神人神ノ御酒ヲ持てまいり候、神人之名之事秀申候、

〔一〕 御肴煎米大豆次郎會須神人

〔二〕 御盃土器三 殊公事神仁

〔三〕 御尺取役 顯教神人

年神苑

〔四カ〕 御提重子 年神苑神仁

灰塚苑

五 酒次役 灰塚苑神人

## 史料の用語・地名等の解説

### 【あ行】

あかせ 赤瀬

現在遺称地としては、南阿蘇村大字立野字赤瀬、字西赤瀬、北赤瀬、赤瀬ノ上などがある。

あかにた 赤丹田 熊本県阿蘇市波野大字赤仁田か。

あかみずのばば 赤水馬場

下野の三の馬場の一つで最後に入る馬場。はての馬場、終の馬場という。現在の阿蘇市赤水地区に推定される。この馬場に入る口は「おいらの口」という。くに木原、入江崎という名所がある。

あしげが 芋毛カ渡 南阿蘇村河陽濁川にあった瀬。

あそけいず 阿蘇家系図 ↓別添系図参照

あそしな 阿蘇品 阿蘇市宮地の北部の三野の阿蘇品。

あそのごんだいぐうじ 阿蘇権大宮司

神武天皇の子、彦八井耳命、草部吉見神の子孫。阿蘇下宮のある宮地に館を構え、阿蘇下宮の祭祀を司る。草部を称する。下野狩では、矢部・南郷に館を置く大宮司と阿蘇の権大宮司は、鬘搔馬

場の入口早一口の二合石で合流し、そのとき、権大宮司が大宮司に扇を捧げた。ここで歌を唄い、三の馬場での鬘狩は始まった。

あまくさ 天草 熊本県天草市を中心とする天草諸島。

あやの 綾野 阿蘇市の手野近辺。

あらせ 荒瀬

ときに早角・音鹿責の集落とともに狩（獵）祭に参加した。現在遺称地は確認できない。阿蘇家所蔵文書の鷹山下野狩鹿立鹿藏之事では、荒瀬は「ヲトカセノ南クホヤ野也、此所トウミヨウ下云所アリ」とあり、荒瀬の南とする説もある。しかし、筆者は、黒川の集落ではないかとも推測する。根拠は、『下野狩日記』には現在の坊中の近くの黒川は見えても下野近くの黒川が見えない。黒川は社頭鹿渡橋がある地で古くから集落があったと思われるからである。

いいべのはま 飯辺の浜の明神

「いへのはま」とも見える。飯辺の浜の地名が確認できないが、「いへのはま乙姫明神」とあることから阿蘇市大字乙姫の集落を指すか。なお、「浜神社」という社が阿蘇黒川の集落の中にもあり、春三月の田作神事の際に立ち寄る重要なお宮である。

いくら 井倉 熊本県玉名市伊倉北方・伊倉南方。

いけのくぼ 池ノ窪

南阿蘇村乙ヶ瀬集落の上、吉岡の一角にある地名。  
いちげ 市下 熊本県南阿蘇村市下。

いちのかわ 一の河

現在の阿蘇市永草の市ノ川が遺称地。二〇〇九年春、総合地球環境学研究所が市ノ川池奥でボーリングを行った結果、長い割合安定した池であったことがわかった。一幸も「一のこう」と読み、この一の河を指した可能性がある。

いちこう 一幸 ↓ いちのかわ 一の河  
いづくしつか 巖塚

狩祭（狛祭）を行う塚。祭礼は、乙津ヶ瀬（音鹿責）、沢津野（早角）、および荒瀬の集落が担当。薦原口、薦池原の中間にある塚。現在遺称地なし。

いで 井手 阿蘇市中通の井手。  
いとうちゆうえもん 伊藤忠右衛門

熊本藩主細川宗孝の御側取次役を務めた。延享四年（一七四七）、江戸城内で細川宗孝が板倉修理によって刺殺されたときも登城の供として出仕していた。この事件を契機に落髪し致仕した。

いまむらし 今村氏

草部吉見の子孫。下野狩に使用する鎗を認めるのは、今村家の家役である。

いりえさき 入江崎 赤水の馬場の内。下野の名所。  
いりの 入野

北鹿立のうち。阿蘇に宮地と宮山に入野姓は多い。場所未詳。

いわくら 岩倉

うちこしの原 うちこしの原

甲佐・かたしたの人の下野狩稽古場。

うまかくしやま 馬隠し山

中の馬場にある地名。とがり矢の形に似ているところから、「とがり矢山」ともいう。現在の阿蘇市大字赤水の字馬隠のことか。

うまやま 馬山 ↓ まやま 馬山

うわこめつか 上米塚 米塚の上方に小さな塚がある。

えぼしかたち 烏帽子形 烏帽子岳のことか。

えら 恵良

南北朝に阿蘇大宮司となる恵良氏の名字の地。阿蘇南郷谷のうちか。遺称地未詳。

おいけ 御池

御嶽の霊池のことか。阿蘇中岳山頂の火口湖を指す。

おいらのくち おいらの口（御入口）

赤水の馬場への入口。遺称地はない。

おうくつまらそんじや 殃屈摩羅尊者

サンスクリット語の「アングリマール」の音写。「央掘摩羅」尊者、「鶯掘魔」尊者なども音写。コーサラ国シラーヴァステイー（舍衛城）の出身。釈迦の弟子。修行し最高の悟りを得た人物であるが、もとは、多くの人を殺す残酷な賊であった。しかし、釈迦に出会い殺そうとしたが、逆に諭され出家し弟子となった。

おおくま・こぐま 大熊・小熊 ↓ たずはらしや 田鶴原社

下野狩で騎馬の神官などがアピールを行い、これを多くの人々が観覧した場所。阿蘇市宮山地区の東に字岩倉がある。米塚の溶岩の先端がせり出した場所で、溶岩の岩が窪地を囲むように並び、これがスタンド（栈敷席）として使用されたとも考えられる。いわくらのすざき 岩蔵のすざき

赤水の馬場の妻手の馬が立つ所。これから五段ばかりおいて弓手の馬が立つ。岩蔵の北側付近か。

いわさか 岩坂 熊本県菊池郡大津町大字岩坂。  
うえの 上野 熊本県上益城郡御船町大字上野。

うえのごかしよ 上野五ヶ所

遺称地未詳。御船町大字上野に関係するか。

うえはしろうだゆう 上羽四郎大夫

十八世紀半ば、十九世紀初頭に活躍した熊本藩士。牧之允、部ともいう。禄高三五〇石、外一五〇石。奉行職を務める。延享三年（一七四六）十二月、文化元年（一八〇四）四月の間、高橋町奉行うきしまはら 浮島原

駿河国にあった広大な湿原。静岡県沼津市原から吉原にかけてあった。

うしみね 牛峯

中世の阿蘇の北郷に見える村。阿蘇谷東部の外輪山にかけての地域にあったと思われる、遺称地未詳。

うぞえのかみ 卯添の神 ↓ にしのみやじんじや 西野宮神社

おおの 大野

熊本県山都町蘇陽大字大野。ここには幣立社がある。

おおの 大野

阿蘇の南郷のうち。高森町大字下切字下大野原・東大野原が遺称地か。

おおまめふだ 大豆札 阿蘇市大字中坂梨豆札付近か。

おおやま 大山 阿蘇市南坂梨のうち。

おごもり 小籠（尾小森） 阿蘇市大字手野のうち小籠。

おぐに 小国 熊本県小国町小国。

おぐらやま 小倉山

南阿蘇村大字北小倉山・南小倉山が遺称地か。

おさと 小里 阿蘇市内牧の北。

おじん 小陣

遺称地未詳。阿蘇氏の一族小陣氏は山都町馬見原に住す。

おのうえ 尾上 熊本市尾ノ上か。

おちみず 落水

東之鹿立のうち。鬘搔地区通称という。ここには後藤姓の家が数軒あり、社祠（健甕龍命）があった。また、米塚の西ともいう（鷹山下野御狩鹿立鹿蔵之事「阿蘇家所蔵文書」二三五頁）。

おとがせ 音鹿責

下野狩場の中にあつた集落。現在の南阿蘇村大字河陽の乙ヶ瀬集落。この人々が早角の集落とともに巖塚で狩（狛）祭を行った。

## あとがき

二〇〇六年から、私は大学共同利用機関法人人間文化研究機構に所属する総合地球環境学研究所のプロジェクト研究にコアメンバーとして参加することになった。そのテーマは「日本列島における人間―自然相互関係の歴史的・文化的検討」である。この研究全体は、サハリン、北海道、東北、中部、近畿、九州、沖縄の七つの地域班と全体の問題を論じる三班を設定する大プロジェクト研究である。私は、九州班の班長として、阿蘇・くじゅうをはじめ九州の山岳地帯に広がる草原地帯を舞台にその草原の利用と維持の問題を中心に、地質学、植生学、考古学、歴史学、民俗学、地理学などの諸分野の研究者を集め、調査・検討を進めてきた。

この調査の際に出合ったのが下野狩神事という阿蘇宮の神事である。この神事は、天正六年（一五七八）を最後に廃絶したが、中世を通じて阿蘇最大の神事であり、この神事を怠ると、阿蘇家は危機に瀕するという重大神事であった。また、焼き狩神事というもので今日の三月の野焼きと密接に関係したものであり、今も続く阿蘇宮の火振り神事すなわち田作神事に連動するものであった。そこで、この神事の検討が阿蘇・くじゅうの草原の歴史の解明につながると考えた。

一方、私は、二〇〇七年からは、科学研究費の基盤研究Cで「環境歴史学からみた「森」と「原」「野」に関する研究」を行ってきた。こちらでは、古代・中世の歴史や文学の資料から、「森」と「原」「野」の関係について、地方に広がる「原」「野」と京都などの都市部の周辺に展開する「野」と「森」を比較しながら検討を行ってきた。阿蘇においても、総合地球環境学研究所の研究と連携させながら、フィールド調査と新史料の検討に努めることになった。

この二つの研究において、下野狩神事の検討は最も重要な研究課題となった。この基礎史料が永青文庫本の『下野狩日記』上・下、『下野狩旧記抜書』、及び阿蘇宮司家所蔵の下野狩関係の記録・文書である。これまで、下野狩については、主

に杉本尚雄、阿蘇品保夫、村崎真智子、佐藤征子など諸氏の研究があり、また、現地の宮川三友氏の地道な調査・研究があったが、その基礎となる史料は、神道大系や阿蘇町史に公刊された『下野狩集説秘録』（江戸時代の編纂）しかなかったこともあり、上記の中世の狩の実像を伝えた史料はこれまで公開されてはいなかったため、下野狩の実像が解明されているとはいえない段階にあった。

そこで、二〇〇七年に永青文庫本の『下野狩日記』上・下、『下野狩旧記抜書』の調査を行い、その後、講読を大学院の飯沼ゼミを中心に行った。特に、この翻刻作業に当たって、当時、飯沼ゼミに在籍していた三谷絃平、山口佐和子、安田豊等の協力を得て原稿を四年の歳月をかけて作成した。その過程で、阿蘇神社の池浦秀隆氏、熊本大学准教授春田直紀氏、別府大学学長豊田寛三氏にも格別のご協力をいただいた。

さらに、今回の公刊にあたっては、本書の収載した史料を所蔵する永青文庫、及び阿蘇宮司阿蘇惟之氏には、格別のご配慮をいただき刊行する運びになった。記して感謝したい。

併せて、本書は、独立行政法人日本学術振興会平成二十三年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金（研究成果公開促進費））の交付を受けて刊行するものであることを明記する。最後に、刊行を引き受けてくれた思文閣出版にもさまざまなご配慮をいただき感謝する次第である。

平成二十四年二月吉日

飯沼賢司

◎編者略歴◎

飯沼賢司（いぬま・けんじ）

1953年長野県に生まれる。早稲田大学文学部（日本史専修）卒業、同大学院文学研究科博士課程日本史専攻に進学。

1985年、早稲田大学文学部助手、非常勤講師を経て、1987年に大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員となる。この時期から、宇佐・国東の研究、八幡神の研究を始める。

1993年、別府大学助教授に就任。1997年、別府大学教授。この時期から、環境歴史学を提唱。2008年より、別府大学大学院文学研究科長。

〔専門〕日本古代中世史、環境歴史学、家族史。

〔主要業績〕『大分県の歴史』山川出版社、『八幡神とはなにか』角川書店、『環境歴史学とはなにか』山川出版社、『岩波講座日本通史』岩波書店、『講座日本史』東京大学出版会。

あそしものかりしりょうしゅう  
阿蘇下野狩史料集

2012(平成24)年2月29日発行

定価：本体7,500円(税別)

編者 飯沼賢司

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎  
製本

©Printed in Japan ISBN978-4-7842-1611-6 C3021